

崖断の日休

角川小説新書

休日の断崖



昭和三十六年十月十日 初版発行

定価 貳百円

著作者 黒岩重吾

発行者 角川源義

印刷者 平井義一

東京都千代田区飯田町一ノ二三

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話九段 〇一一二（代表）一五

（落丁・乱丁本はお取替え致します）

崖の断日休

黒岩重吾

角川小説新書

目次

法善寺の夜	五
変死	三
意外な風評	五
不貞	七
十川の秘密	一七
大理石の女	二九
妻の嫉妬	一五
京都の思い出	一七
銀粉の仮面	二〇

二〇	一七	一五	二九	一七	七	五	三	五
----	----	----	----	----	---	---	---	---

法善寺の夜

一

バー赤帽子は、梅田新道の東、宇治電ビルの南にあった。その場所は北の新地のように華やかではないが、落着いた優雅なバーが、暗い細い道に、点々とあえかな夜の花の美を競っていた。その中で、赤帽子は幾分豪華な構えで、他のバーと色合を異にしていた。それは外観だけではなかった。事実赤帽子は、それぞれわずかな特定の客を、必死で掴んでゐる周囲のバーと異り、広く大阪財界人のグランドサロンとして、最近売り出しかけていたのである。

土曜日七時のこの辺りは、梅田や梅田新道の混雑とは対照的に、ひそやかであった。通行人の多くは手を組んだ男女の二人連れであった。おそらく濃い秋の夜の香り

をたたえた、中之島河畔で、語り合うか唇を合わせるのであろう。彼等の多くは足取りも軽く、赤帽子の前を通り、明治建築の面影を宿す中之島河畔の、高等裁判所のシエルエットに向かって消えて行った。

高等裁判所の向かいには、歴史の古いK病院があった。その古びた暗い玄関のガラス戸が開き、白衣を着た年輩の医者と、中背の、身体のがっしりした中年の男が出て来た。

男が頭を下げるより一瞬早く、医者が頭を下げたところを見ると、その男は、医者ないし病院にとって、かなり重要な人物であることがわかれるようだ。充分肉の乗った赤黒い顔であるが、脂肪でだぶついているのではなく、引締った精悍さが、眼、唇、盛り上がった鼻に端的に現われていた。

男は医者と別れると、ゆっくりと、腰で歩くような足取りで、赤帽子の方に歩き始めた。

その男、石原工業取締役営業部長十川隆造が、赤帽子のドアを押したのは、それから十分後であった。

土曜日の七時という時間のせい、客はまだ誰も居なかった。女達はそれぞれのボックスに固まって雑談していたが、いっせいに十川を見た。「いらっしゃい」と言う女達の声には張りがあり、どの顔も商売気を離れた好意の微笑に溢れていた。確かに、今夜の最初の客が十川であった事を、女達は喜んでいようであった。

ただ一人、隅のボックスに坐り映画雑誌を眺めていた、眼の大きい痩せた少女のような女だけが、冷たい視線をすぐ雑誌に戻した。布川麻理であった。

十川が中央の広い席に腰を下すと、麻理以外のすべての女達は十川の廻りに集まった。

十川のすぐ傍に腰を下したのは、つい最近までファッションモデルをしていた九条圭子であった。ぬけるように色の白い、切れ長の眼の、つんとした鼻の圭子は、赤帽子の中では、群を抜いた美貌の持主であった。十川が赤帽子のマダム、鳴尾夏江とともに、最もひいきにしている女であった。

「十川さん、明日の出発は八時半でしょ」

と十川の右隣りに坐った曾野美津枝が言った。太り気味の肌の綺麗な美津枝は、赤帽子では最古参で、十川にとつては、客を招待する時、欠かす事の出来ない女であった。事実、客と言ひ合う冗談の中に、美津枝は、相手を楽しませ、適当に感嘆させる才智を持っていた。

「うん、八時半の出雲だ」

と十川は答えた。出発といっても、出張や旅行ではない。石原工業が、このたび己れの傘下として手中におさめた、高柳工業の専務として、十川は明日、単身東京へ出発するのである。

「いよいよお別れね」

と圭子は感傷じみた口調で言った。そして顔を十川の肩にもたせかけた。たとえ、己れの美貌を鼻にかけても、それが気にならないほど整った圭子の顔は、今もやはりそんな感傷じみた言葉が似合わないほど輝いていた。

「そうだな、皆には長い間世話になった」

十川の言葉は、女達をちょっとセンチな気分にし落し入れたようだ。女達の大部分は、十川を自分達の仲間のよ

うに錯覚していたかもしれない。それほど、十川はしげしげと赤帽子に通って来ていた。

さっきから、一人映画雑誌を見ている麻理に、ちらちら視線を走らせていた美津枝が、たまりかねたように言った。

「麻理ちゃん、ここへいらっしやい」

麻理がなぜか、十川をさけているのを、女達は知っていた。それほど、麻理の十川に対する態度は露骨であつた。

十川は穏やかな眼で麻理を眺めた。こんなバー勤めには、どう見ても場違いな、少女のような固い線が、麻理のおとがいにあつた。

「麻理ちゃん来いよ、君ともお別れじゃないか」

「はい、参ります」

麻理は意外に素直に答えると、雑誌を置き十川の席にやって来た。

十川には冴子という一人娘があつた。冴子は原因不明で家出しているが、それまで、赤帽子に遊びに来ていた。

父が常連になっている店だから来たのではなく、赤帽子の雰囲気が好きだったのと、麻理が居たからだ、と十川は思っている。

麻理はバー勤めのかたわら、大阪芸術座に籍を置いていた。冴子も学生演劇に浮身をやつしていた。おそらく冴子は女子大を出たら、大阪芸術座に入るつもりだったのであろう。

冴子が家出してから、麻理は十川に笑顔を示さなくなつた。当時十川は、冴子の家出の原因や、身を隠している場所を、麻理が知っているものと考え、おどし、すかし、ついには、手について教えてくれ、と頼んだが、麻理は知らない、との一点張りだった。

十川はシャンペンを抜かせた。そして女達を眺め廻しながら言った。

「ちよっと早いが、今日は、僕の大阪でのクリスマスだ、みんな乾杯してくれ」

十川のような男が、たとえ冗談にしろ、バーの女達に己れへの乾杯を求めたのは、ちよっと妙であつた。

「十川さんのクリスマスに乾杯……」

と圭子が氣取った声で言った。圭子はもちろんそれを最初に言う権利が、自分にあると信じていた。

なぜなら、この場所には、マダムの夏江が居なかったからである。

十川が高柳工業の専務として、東京に行く事を女達が知ったのは、夏江からであった。

夏江は大阪財界の消息に通ずるため、二種類の経済新聞を詳しく読んでいた。その人事欄で、十川の東京行を夏江はかなり早く知っていた。夏江はある点、そのように才つけた、女であった。

皆が乾杯し終ると、十川は腕時計を見て立上がった。

「あら、もうお帰り、マダムが来るまで待っててよ、叱られるわ」

と美津枝が言った。マダムの名が出たのが氣に喰^くわないのか、圭子は黙っていた。

「いや、マダムは、明日大阪駅に送りに来るだろう、そのぐらいの気持は見せてもらってもいいからね」

喋^{しゃべ}りながら十川は、スタンドの電話の方に歩いて行った。

耳に当てた十川の受話器に、若いくせにさびのある、日本建設新聞社長川草成の声が、ゆっくり聞えて来た。

「今出かけようと思つてたところなんですよ、すぐ行きますから……」

「うん、だが場所を変えよう、今夜は飯でも喰いながら、ゆっくり話したいんだ、なにを喰いたい？」

「ふぐですな」

と川草はすぐ答えた。体重十九貫、フランク永井に今少し苦^{にが}みを加えたような川草が、唇を突き出し、子供のような表情で喋っている顔が、ありありと浮かび、十川は微笑した。

仕事関係の人々との打合わせは、昨日までで綺麗にすませていた。今宵^{こよひ}は私的な交際の人間と、心おきなく語り合いたかった。

その中で、十川が最も逢^あいたかったのが、世間から、ややもすれば、ゴロ、と見られがちな、一業界紙の社長

であったのは、ちょっと奇異かもしれない。

だが四十六歳の十川は、三十四歳の川草を、彼が接触する男性達の中で、最も信頼し、愛していた。といっても、十川は仕事上の秘密など、めったに川草に喋らなかつた。彼が川草を信頼し愛したのは、仕事上の事ではなく、もっと深い人間としてのなにかであった。

受話器を置いた時、麻理が立って十川の傍にやって来た。冴子の事でも話しに来たのだろうか。が、麻理の言葉は十川の緊張をゆるめた。

「十川さん、今喋ってた人、川草さんでしょ」

すぐ電話に出たので、十川は川草の名を言わなかつた。それに席と電話とはかなりの距離があつた。なぜそんな事を聞きに来た、という事よりも、十川は麻理の直感に驚いた。

「よく分つたね」

と十川は言った。そして、そんな言葉を聞いた時、麻理の真剣な表情をかすめた、とまどいにも似た弱^{かげ}を見て、十川は、おやつ、と思つた。

「お逢いしたら、また来て下さるよう、言つて下さい」と麻理は大きな眼を見張つて言った。

今から川草に逢つた時、揶揄^{やゆ}する種が一つ出来たのを楽しみながら、十川は赤帽子を出た。

皆送つて出たが、最後まで十川の手を握っていたのは圭子であつた。麻理は俯向^{うつむ}いて十川を見送つた。

二

法善寺横丁の狭い通りには、相変らず大勢^{おおぜい}の人間がぞろぞろ通つていた。だが、土曜日の八時という時刻は、店々の種類によつて、客の入りは全然違つていた。

たとえば、アベック専門のお好み焼屋や、個室喫茶は満員であり、名代^{なだい}の割烹^{かつぱう}や小料理屋は、今店開きをしたところ、といったように、客を待つ仲居^{なぐい}が、ずらりと並んでいた。

行きつけの丸喜の、暖簾^{のれん}をくぐると、有名土建会社社長^{社長}の二号であるお内儀^{かみ}が、満面に笑^えみをたたえて十川を迎えた。いうまでもなく、十川は上客の一人であつた。

「お客さん、お待ちしてはりますよ」

「良い男だろう？」

「ほんまに……」

お内儀は手で口をおさえながら、けらけら笑った。

「入って来はった時、あて、ほんのちょっぴり、どきっとしましたわ」

「ほんのちょっぴり、ってほんとか……」

それには答えず、お内儀は、十川を川草の待っている部屋に案内した。

あぐらをかいていた川草は、十川の顔を見るとふかしていた煙草を置き、膝を揃え、無造作に頭を下げた。長い間、親しい交わりをしているが、川草は、逢えば必ずこのようにして挨拶した。

「長い間、逢わなかったようだな」

と十川は言った。

「ユニバースに行ったのが、先週の土曜だからちょうど一週間ですか。いそがしかったでしょ」

と川草は、またあぐらをかいた。

「なんやかやと、雑用が多くてね」

十川は、紋りで顔をふくと、

「いよいよ、今夜で、大阪の夜も見おさめだな」

「遊びおさめでしょ」

と川草は白い歯を出して笑った。

「ほんとだ、お互いよく遊んだな」

十川はふと懐しむような限付になった。二人は憩いが欲しくなると、どちらが誘い合うともなく、北や南のキヤバレーや、バーなどに遊びに行った。遊びにおいて、二人は全くのコンビであった。

てっちりをつまみ、盃をやり取りし始めたころから、川草は、十川が、いつもの十川のようにあけっ放しでないのに気づいていた。それは住み慣れた大阪を離れる事への感傷が十川の胸を満しているためではなかった。十川は感傷にひたるような人間ではなかった。明日の仕事への意欲が、精悍な身体の隅々にまで満ちているはずである。

川草は、十川の盃へ酒をつぎながら、何気ないように

言った。

「十川さん、今までいろいろお世話になったお礼に、なにか僕に力にならせていただきたいですなあ、どこまで力になれるか、分りませんけど……」

「世話なんて水臭いことを言うなよ、俺おれの方が君にどれだけ世話になったか、じゃ、世話のなりついでに、頼むとしようか」

と十川は言つて、酒の満ちた盃を差し出した。川草は自分の盃をそれにあてた。かちんと音がしたが酒は洩れなかった。二人は顔を見合わせて微笑した。

それから十川はぐいぐい飲み出した。川草も負けずに飲んだ。十川はなかなか、その頼みという話に触れなかった。

川草もそれ以上聞き出そうとはしなかった。酔いが廻るにつれ、二人は過ぎし日の、人には言えない遊びの数々を、青年のように大声で喋り合った。

キャバレーなどで、眼につけた女給を、どちらが早く陥落させるか、競争した話。

白々や白黒を見に行ったり、秘密映画を鑑賞した翌日、それが警察にあげられた事を知つて、冷汗ひやあせを流したような思い出。

堅人かたじんで通っている関西財界の要人を、日本建設新聞が、非公式に開催した、ファッションモデルばかりの、ヌード撮影会に招待したら、その要人が、ずーっと膝をつき通して写したので、会が終った後しばらく立てず、寝ていた話。事実それがもとで、その要人は長い間神経痛に悩まされ、財界を引退せざるを得なくなった事など……。

二人の談笑は、まるで二十代の学生が、思い切り青春を楽しみ、そのいたずら話に、吾れわを忘れるような、罪ない楽しげなものだった。

サービスに出入りしていたお内儀や仲居は、二人の話を小耳にはさむと、けらけら笑い、あげくはあきれたように、中年を問もなく終ろうとする男と、間もなく中年に入ろうとする男の、稚氣に満ちた顔を眺めるのだった。ふぐ料理がてっちりに入り、ぐずぐず、瀬戸物せとものの鍋なべが煮え始めるころには、階下の方から、三味しゃみの音おと共に、

小唄の渋い声が流れて来た。

川草はふと耳を傾けた。

「やっぱり法善寺だな、まだ三味の流しが居るんですな」

「うん、あれは小勝といってね、ちょっとしたお師匠なんだよ、一げんの客には聞かせないんだ」

仲居が、呼びまひよか、と十川の顔を見た。十川は首を振った。

「女と別れるなら小唄も良いが、野郎同士には感じが出ない」

「ほんとですな」

すると十川は仲居に言った。

「ちょっとこみ入った話があるんで、席を外してくれないか」

仲居が去ると、十川はハンカチで額の汗をぬぐった。

「熱いな、窓をちょっと開けようか……」

「そうですな」

と川草は答えた、自分で立って十川は窓を開けた。冷や

やかな夜風が、むっとこもった室内の熱気を、洗い流した。窓の外には法善寺横丁のネオンと屋根があった。屋根の上には巨大な食堂百貨店のネオンが輝いていた。

十川はしばし、窓辺に立って夜景を眺めていた。後から見ると十七貫の十川の肩幅は、十九貫の川草の肩幅より広いようだった。

ふと川草は、ここ数年、自分が見込み、交際して来た男の将来を思った。それは我国財界に主要な地位を占める、新十川コンツェルンの領袖であった。そして、その時川草は、一業界紙の社長ではなく、政界の一方の旗頭であった。が、この思いはなぜか、いつものように、川草の胸をときめかせはしなかった。

やがて十川は窓を閉めると、座に腰を下した。わずかの間、夜風にあてられていただけなのに、十川の顔からは、酔が消え始めていた。

「その頼みというのはね——」

十川は冷えた盃をあおると、川草をじっと見た。

「君が大阪に居る間、暇な時でいいから、冴子の行方を

探して欲しいんだ、僕は、冴子が大坂の何処かに居る、そんな気がしてならないんだ」

川草は黙って頷いた。言葉に出すより、川草のそんな頷き方は、人に信頼感を与える、重々しさがあった。が、十川が、この時よく川草の顔を観察したなら、苦悩に近い暗い翳を見出して驚いた事だろう。それは川草が、十川には一度も見せた事のない、暮色のような暗さであった。

「冴子さんが家を出たのは、この春でしたね」

と川草は呟くように言った。

「そうだ、あれからもう半年たつ、本当に君には可愛がってもらっていたな。よく、『川草さん、三十四にもなるのに、どうして一人なのかしら』と僕に尋ねていたが……」

と十川は言って川草を見た。なにか川草の言葉を期待するような視線であった。が、川草の言葉は、それを裏切ったようだ。

「十川さん、貴方には冴子さんの家出の原因が全然分り

ませんか、失礼ですが、奥さんとの間など、うまくいったんですか？」

「原因は全く分らない、僕は冴子を束縛したことは一度もなかったし、だから冴子の方からいえば、家出しなくとも、どんな事でも出来たはずだ。泰子との間は、僕が知る限り、争い一つ聞いた事がない」

川草は分るか分らないくらい眉をひそめ、吐出した煙草の煙を見送っていた。そんな時の彼の顔は、中年を過ぎた男のようであった。

「川草君、冴子の事を頼んだついでに、今まで誰にも話さなかった僕の家庭の事を聞いてくれるか……」

十川の声は沈んでいた。川草は緊張した。共に女遊びをしながら川草は、泰子という、若い美貌の妻を持ってゐる十川が、なぜ飢えたように、次から次へと女を漁るのか、不思議に思っていたからである。十川の妻泰子は、川草が今まで知り、また見て来たどの女性よりも、いやどの女性とも質が違っていた。もし今の世に、貴族と呼ばれる人種があるなら、泰子は、確かにそれに入るべき

雰囲気有していた。

三

十川の妻泰子は、冴子の本当の母ではなかった。十川の前妻であり、冴子の実母である裕子は、昭和二十三年三月、大阪の大半が焼野原になった日、住吉の自宅で、家もろとも焼け死んだ。当時八歳の冴子は、裕子の実家である和歌山の海南に疎開していた。

中支で終戦を迎えた十川は、翌年復員して初めて裕子の死を知った。

冴子は父のもとで暮すより、海南に居る事を望んだ。

冴子が三歳の年に十川は応召したのだから、冴子は父の顔をほとんど覚えていなかった。父という実感がわかなかったのも、無理はないであろう。

戦地で絶えず、十川が思い続けて来たのは、冴子よりも裕子の事であった。裕子は恩師の娘で、十川が初めて愛した女であった。

十川は、冴子を無理に自分の手元に引取ろうとはしな

かった。十川はひたすら仕事に打込む事で、裕子の事を忘れようとした。

冴子が和歌山高校の二年、十七歳の時に、十川は現在の妻泰子と再婚した。

泰子は亡父の友人で、十川が学資を出してもらった、K病院の大株主の娘であった。その時十川は四十一歳、泰子は三十歳であった。

泰子は裕子よりも美しかった。だが十川が泰子と結婚したのは、その美貌ゆえではない、眼から鼻へかけての線がどこか裕子に似ていたからである。

が、すでに営業部長の要職にあった十川は、家庭生活に重きを置く事は出来なかった。交際や宴会が連日十川を待っていた。

初婚だった泰子には、四十一歳の夫の、このような日常生活が、結婚前の理想とかなり喰い違っていたのは無理はない。それに泰子は裕子と違って、激しいまでの個性を有していた。泰子は、遅い夫の帰りを、一人で待っているような性格ではなかった。

間もなく十川は、この結婚を後悔し出した。二人の間に溝みぞが出来ると、泰子はぴたり、と自分の心を閉じた。泰子はその方からその溝を埋めようとする努力はしなかった。

いつか、泰子には男友達も出来たようである。また十川は、結婚する前、泰子が、年下のK病院の若い医員と激しい恋愛をしていたのを知った。その医員には妻があった。

十川が紅燈こうとうの女遊びに、異常な興味を覚え始めたのは、ここ二三年であった。

海南の冴子の祖母が亡くなり、冴子が十川のもとに引取られたのは、冴子が高校を出る年であった。冴子は大阪の女子大に入り、学生演劇に熱中した。

十川は冴子の望みは、どんな事でもかなえてやった。冴子は感受性の強い女にありがちな気ままな学生時代を送った。

泰子と冴子との間は、仲が悪いというより、お互い全く無視し合っていたようである。だからトラブルは起らなかった。

なかった。

いってみれば、一つの家に住む、この三人の男女は、お互い勝手気ままな、自由な生活を享楽きやうらくしていたわけだ。が、その底には、氷のような冷やかさがあった。

冴子が家出した時、十川は初め誘拐ゆうかいされた、と思った。が間もなく、冴子の机の抽出ひきだしからは、感ずる事があって家を出ます、という置手紙が発見されたのである。

十川は話し終ると、手を叩たたいて女中を呼び、酒を持っ来させた。十川の面上から酔は全く醒さめ果てていた。

川草はなんとなく吐息を洩らした。

「こんな僕の家庭の事など、年下の君に話すのは面おもはづかしいが、冴子の事を君に頼む以上、やはり話すのが本当だと思ったんだ。僕は初め、男が出来たのではないのか、と思って、私立探偵にも徹底的に調べさせたが、男関係は、君に遊びに連れて行ってもらう、ぐらいの線しか出なかったよ」

「そうですか、僕が男関係の線に出るくらいでしたら、冴子さんの異性関係は完璧かんぺきですよ」